

PRESS RELEASE



左上)
パブロ・ピカソ(1881-1973)
《貧しき食事》
1904年/ドライポイント、紙/46.3×37.7cm/
富士ゼロックス版画コレクション
©2016 - Succession Pablo Picasso - SPDA
(JAPAN)

右上)
パウル・クレー(1879-1940)
《ホフマン的な場面》
1921年/リトグラフ、紙/31.7×22.8cm/
富士ゼロックス版画コレクション

左下)
ヴァシリー・カンディンスキー(1866-1944)
《小さな世界IV》(版画集『小さな世界』より)
1922年/リトグラフ、紙/35.8×28.8cm/
富士ゼロックス版画コレクション

右下)
ロベルト・マツタ(1911-2002)
版画集『結び目の中心』より
1974年/エッチング、アクアチント、紙/
60.5×44.7cm(用紙)/
富士ゼロックス版画コレクション
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016
C0958

この展覧会は、写真印刷や映像などの「複製技術」が高度に発達・普及し、誰もが複製を通して美術を楽しむことができる時代に、ピカソをはじめ20世紀の欧米を中心とする美術家たちが、どのような芸術のビジョンをもって作品をつくっていったのかを、富士ゼロックス版画コレクションと横浜美術館の所蔵品によって検証するものです。

ドイツの哲学者ヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)は、写真発明以降「複製技術」の発展・普及によって、人びとの感じ方や芸術作品の受け止め方、芸術への期待が大きく変化し、絵画や演劇などの伝統的な芸術作品にとって危機的状况が生まれたと指摘しました。実際、20世紀には伝統的な美術のイメージを払拭するさまざまな潮流が登場しました。キュビズムやフォーヴィスムなどの空間と色彩の新しい表現に始まり、第一次大戦後は伝統的な美の概念を覆すダダ(反芸術)や、抽象的な様式を確立して理想の社会を目指すバウハウスやロシア構成主義、無意識の探求によって人間を解放しようとするシュルレアリスム、第二次大戦後には大量消費社会を反映したポップ・アートが現れ、1960年代にはゼログラフィー(電子写真・複写技術)が美術作品に導入されました。こうした20世紀の美術史を「複製技術」という時代背景から見直すことで、芸術作品の危機に対する美術家たちの挑戦として読み解くことが本展のねらいです。

横浜に主要な拠点を持つ富士ゼロックス株式会社と横浜美術館のコレクションの共演となる本展は、双方に共通する代表的な美術家の作品を中心に、版画、写真、書籍など複製技術を用いた多様な作品と、油彩画や彫刻など伝統的なメディアによる作品を合わせた約500点を5つの章立てで紹介し、複製テクノロジーが浸透する現代の先駆けとなった時代の美術家たちの挑戦を浮き彫りにします。

本展の特徴

1. 富士ゼロックス版画コレクションを大規模に紹介する初の試み

富士ゼロックス版画コレクションは1988年以来、「版画もしくはそれに類する手段で複数制作されたもので、その時代の精神や文化を表徴する作品」を指針として、欧米と日本の重要な作家による版画、写真、コピー・アート（ゼログラフィーによる作品）、アーティストブックなどを収集しています。そのコレクションは、社業とも関係の深い美術作品（版画）を通しての社会貢献を目指してつくられたものです。現在約950点を擁し、2010年に横浜のみなとみらい21地区に新築された研究開発拠点ビル内の「富士ゼロックス・アートスペース」で定期的な展示を行っています。

そのコレクションからの約100件・350点がまとめて展示されるのは本展が初めてとなります。

2. ヴァルター・ベンヤミンが言及した美術や写真の実作品

ヴァルター・ベンヤミンの論文『複製技術時代の芸術作品』は、その後の美術、写真、映画の評論だけでなく、メディア論や社会学、思想研究に大きなインパクトを与え、今日も多くの人びとに読み継がれ、解説書も出版されています。本展は特にベンヤミンの写真や美術に関する考察や発言に注目し、彼が著作中で言及した写真や美術の作例を展示します。

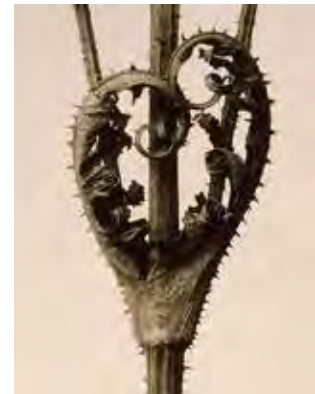
例えば：

- ナダールによるボードレールの肖像
- アッジェによるひと気のないパリの都市風景
- コンタクトプリントの発明者タルボットが美術史の名作を写した《ラオコーン像》
- 写真による社会構成員の総目録を目指したザンダー
- 植物の拡大写真集を『芸術の原形態』として出版したブローズフェルト
- ベンヤミンが「複製としての烙印」と呼んだ廃品コラージュを作ったシュヴィッターズ
- ベンヤミンが終生愛好した水彩画の作者クレー など

そのほか、パブロ・ピカソ、ジョルジュ・ブラック、ハンス・アルプ、マックス・エルンスト、ラースロー・モホイ=ナギ、マルセル・デュシャン、さらにベンヤミンが高く評価したシュルレアリスムの詩人のひとりポール・エリュアールがマン・レイと共作した詩画集など、ベンヤミンの著述に登場する代表的な写真家や美術家たちの実作品を、美術史の流れの中で鑑賞することができます。



ナダール(ガスバル＝フェリックス・トゥールナション)(1820-1910)
《シャルル・ボードレール》
1856年頃(1978年のプリント) /
ソルテッド・ペーパー・プリント / 27.0×21.0cm /
横浜美術館蔵



カール・ブローズフェルト(1865-1932)
《ディフザクス・ラツィニアトゥス》(写真集『12枚の写真』より)
1928年(1975年のプリント) /
ゼラチン・シルバー・プリント / 25.7×19.8cm /
富士ゼロックス版画コレクション

3. 富士ゼロックスの最新技術を用いた、新しいタイプの音声ガイドとワークショップ

「SkyDesk Media Trek」による音声ガイド

本展では富士ゼロックスが提供するクラウド発信型音声ガイドサービス「SkyDesk Media Trek」を活用し、来場されるお客さま自身の端末（スマートフォンやタブレットなど）で楽しむことができる音声ガイドを提供します。作品の前で解説を聴くことができるばかりでなく、事前の予習や鑑賞後の余韻として幅広くご利用いただけます。

展覧会関連ワークショップで富士ゼロックスの最新技術を活用

最新のデジタルカラー印刷と手仕事を融合した作品づくりを楽しむワークショップを、富士ゼロックス株式会社の協力のもと、横浜美術館の子どものアトリエと市民のアトリエで開催。手作業から始まり現代の複製テクノロジーを活用しながら複製技術時代のアーティストの手法を追体験する、親子向け・一般向けのワークショップです。

※詳細は関連イベントの3.4をご覧ください。

PRESS RELEASE

展覧会の構成

第1章 写真の登場と大画家たちの版画

黎明期から19世紀末にかけての写真と、ピカソ、ブラック、マチスらによる版画と絵画で構成されます。単品制作のダゲレオタイプに始まった写真は、ほどなく焼き増しが可能となり、印刷原稿として用いられて複製技術の時代を招来しました。本章では、ナダールの肖像写真やアジェの風景写真によって、ベンヤミンが指摘した、絵画とは異なる写真独特の視点を紹介するほか、歴史的美術品の複製としての写真や、鶏卵紙やフォトグラヴィールなどの技術的展開も概観します。これとあわせて、400年にわたり絵画の空間表現を支えてきた伝統的な遠近法を解体したピカソとブラックの版画と油彩画、シルクスクリーンで色彩を自由に用いながら装飾的な画面を展開していったマチスの連作『ジャズ』を展示し、強い個性と高い描写力を持ちながらも、新たな様式、主題、媒体へと挑戦した大画家たちの仕事を見ていきます。

主な出品作家

ナダール/ウジェーヌ・アジェ/パブロ・ピカソ/ジョルジュ・ブラック/アンリ・マチス



アンリ・マチス(1869-1954)
《サーカス》
(詩画集『ジャズ』より) / 1947年 / シルクスクリーン、紙(書籍) / 42.5×65.0cm(用紙) / 富士ゼロックス版画コレクション

第2章 普遍的スタイルを求めて

第一次世界大戦による未曾有の破壊と殺戮は、美術家たちにとって芸術の伝統的な価値観を根本的に精算し、新たな芸術ビジョンを立て直す契機となりました。孤高の芸術家という幻影は消え去り、美術家の集団や組織が各地に生まれ、国際的な連携も盛んになりました。その先駆けとなったダダ(反芸術)では、作家の個性を帯びた筆致の代わりに印刷物や廃品を貼りつけた絵画が登場し、ベンヤミンはそれを「複製としての烙印」と呼びました。また、ドイツのバウハウスやロシアと東欧の構成主義では、幾何学的な形態や色彩を用いた抽象的な構成が研究され、工業製品や建築を含めた普遍的な様式を確立することで理想社会の実現が目標とされました。そして、ダダ、バウハウス、構成主義のいずれも、複製技術を用いた作品集や雑誌、版画集の出版にも力を入れました。この章は、シュヴィッターズの廃物による絵画や、バウハウスを指導したクレー、カンディンスキー、ファイニンガー、モホイ=ナギらの版画、ガボ、タトリン、ロトチェンコらロシア構成主義の実験的な彫刻などのほか、美術家が参画し、豊かな作品図版を含む『MA』『Integral』などの雑誌や書籍、ベンヤミンが『写真小史』で高く評価したザンダーの写真により構成されます。

主な出品作家

クルト・シュヴィッターズ/パウル・クレー/ヴァシリー・カンディンスキー/ライオネル・ファイニンガー/オスカー・シュレンマー/ラースロー・モホイ=ナギ/ナウム・ガボ/エル・リシツキー/フリードリヒ・フォルデンベルゲ=ギルデヴァルト/アレクサンドル・ロトチェンコ/アウグスト・ザンダー



クルト・シュヴィッターズ(1887-1948)
《メルツ絵画1C 二重絵画》
1920年/アッサンブラージュ、油彩、厚紙 / 15.6×13.7cm / 横浜美術館蔵

ダダの美術家たちがつくる、ボタンや切符を貼りつけた絵画を、ベンヤミンは「複製としての烙印が押されている」と評しました。シュヴィッターズによる本作では、古い切符、金属片や釘、靴底の切れ端などが用いられています。

第3章 変容のイメージ

ダダから生まれたもうひとつの流れとしてシュルレアリスムがあります。その代表的美術家のひとりエルンストは戦争から帰還すると一旦油彩画から離れ、挿絵を切り貼りしたコラージュを作り、それをさらに印刷して詩人エリュアールと共に詩画集として出版しました。オリジナルの挿絵の文脈から切り離された形象はコラージュの新たな画面へと移植されたことで、ショッキングなイメージへと変容します。エルンストは「複製の烙印」としての絵画にとどまることなく、複製され流布されることで初めて成立する、「複製可能性に狙いを定めた」(ベンヤミン) 美術作品を構想したといえます。イメージの変容を通して見る人にショックを与えることはシュルレアリスムの美術家の基本語法となり、その中で写真や版画、印刷などの複製技術は、イメージ生成の場として重要な役割を与えられます。本章はエルンスト、アルプ、ミロ、マン・レイ、デュシャン、タンギー、ヴォルス、コーネルらの版画、写真、絵画、彫刻などで構成されます。

主な出品作家

カール・ブロースフェルト/ハンス・(ジャン)・アルプ/マックス・エルンスト/マン・レイ/
イヴ・タンギー/ロベルト・マッタ/マルセル・デュシャン/ジョゼフ・コーネル/ヴォルス



マックス・エルンスト(1891-1976)
《白鳥はともおだやか…》
1920年/コラージュ、紙/8.3×12.0cm/横浜美術館蔵
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016 C0956

3つの異なる挿絵から、フランスの爆撃機、15世紀の絵画に登場する天使、白鳥を切り抜いて貼り合わせたコラージュ。この作品をパリで目にした詩人ポール・エリュアールはエルンストを訪ね、のちに共同で詩画集『反復』と『神々の不幸』を出版することになります。(本展では両詩画集の復刻版も出品されます。)

第4章 大量消費時代にむけて

第二次大戦後の大量消費時代の到来を受けて登場したポップ・アートは、消費材、マスメディア、サブカルチャーなど日常生活を取り巻く複製技術の産物を批判的な、またはアイロニカルな視点から作品の主題として取り上げることで、複製文化そのものを芸術に包摂しようとした。ウォーホルは作家の手の痕跡や自らのメッセージをあくまで排除しつつ、クローズアップや反復などマスメディアや商品広告における複製技術の手法を逆手に取りながら、誰もが知るイメージをテストピースのように提示しています。一方、ポップ・アートの過剰なイメージとは対照的に、表現手段を極限まで切り詰めるミニマル・アートが登場します。ジャッドの作品《無題》における幾何学的な形象や、産業素材の採用、そして作家の個性の排除はロシア構成主義とのつながりを感じさせますが、芸術作品としての自立性を堅持しています。抽象表現主義世代の画家で、理論家でもあったロバート・マザウェルは、スペインの詩人ラファエル・アルベルティがプラド美術館の名画に直に接したときに得た、絵葉書の色彩の記憶を払拭する鮮烈な印象を詠んだ詩「絵画に寄せて」を元に詩画集を作っています。本章では上記の作家たちに加え、オルデンバーグの名作『ノート』と彫刻、斎藤義重のレリーフと版画、吉田克朗、荒川修作の版画と絵画・彫刻などによって構成されます。

主な出品作家

ロバート・マザウェル/ロイ・リクテンスタイン/アンディ・ウォーホル/クレス・オルデンバーグ/
斎藤義重/吉田克朗



アンディ・ウォーホル(1928-1987)
《花》
1970年/シルクスクリーン、紙(10点組の1点) /
91.4×91.4cm/富士ゼロックス版画コレクション
Andy Warhol, *Flowers* / ©2016 The Andy Warhol
Foundation for the Visual Arts, Inc. / Artists Rights
Society (ARS), New York & JASPAR, Tokyo C0975

PRESS RELEASE

第5章 ゼログラフィーと美術家

1960年に始まったゼログラフィー（電子写真・複写技術）の普及は、それまでの機械的な複製技術の時代から、今日の電子情報によるデジタル複製テクノロジー時代への転換を予告する画期的な出来事でした。美術家にとっては、版画工房や印刷所などの専門技術に頼ることなく、複写機さえあれば、発想から完成までのプロセスをその場で短時間に何度でも試み、かつ量産することができるようになりました。いち早くゼログラフィーを作品に導入したムナーリは、複写中の機械の上で原稿となる物体を移動させ、野村仁は自らの身体を機械に密着させて直接複写しました。河口龍夫は化石の拓本をゼログラフィーによって複写し、アルバム『関係—時間：時のフロッタージュ』にまとめています。物質性への依拠からコンセプトの提示へと変化する美術の流れの中で、複写機は美術家が新たな思考の領野を拓く道具となりました。この章では、上記作家に加え、セス・ジーグロープらがカタログだけで展覧会を構成しようとカール・アンドレ、ジョセフ・コースス、ロバート・モリスら7作家に呼びかけて制作されたゼログラフィー作品集『ゼロックス・ブック』をはじめ、1960年代から今日にいたるゼログラフィーを用いた作品で構成されます。



主な出品作家

ブルーノ・ムナーリ／野村仁／河口龍夫／高松次郎／山口勝弘／戸村浩／前田信明／星野高志郎／山崎博／岸田良子

河口龍夫(1940年生まれ)
《Neptunus granvlatius 中新世 甲殻綱 十脚目》
(版画集『関係—時間：時のフロッタージュ』より)
1998年／ゼログラフィー、紙／35.0×25.6cm(用紙)／
富士ゼロックス版画コレクション
©Tatsuo Kawaguchi

トピックス

こどもの日限定、
2016年5月5日(木・祝)は観覧無料！

5月5日のこどもの日は、どなたでも無料で展覧会をご覧ください。
親子ワークショップも開催します。

※親子ワークショップは参加費無料、事前申込制
※当日は横浜美術館コレクション展も観覧無料

富士ゼロックス・アールスペース 関連展覧会情報

本展会期中、富士ゼロックス・アールスペースでは関連作家を取り上げた展示を開催します。通常は平日のみの開館ですが、特別に土日も開館。みなとみらいを散策しつつ、さらなる芸術鑑賞をお楽しみください。

斎藤義重 展

会期 2016年2月22日(月)～5月11日(水)

ミシェル・ビュートルと 美術家たちのアーティストブック展(仮)

会期 2016年5月13日(金)～7月末

会場 富士ゼロックス・アールスペース

開館時間 平日11:00～19:00(最終入場は閉館15分前まで)

休館日 土曜日・日曜日・祝日・5月12日(木)

※ただし「富士ゼロックス版画コレクション×横浜美術館 複製技術と美術家たち—ピカソからウォーホルまで」会期中は、土・日・祝日も開館いたします。

入場料 無料

住所 横浜市西区みなとみらい6丁目1番 富士ゼロックスR&DスクエアIF

問い合わせ 045-755-5111(代表)

アクセス 横浜駅より徒歩8分

<https://www.fujixerox.co.jp/company/event/hanga/exhibition.html>

関連イベント

1. トークセッション

「富士ゼロックス版画コレクション その魅力と使命」

富士ゼロックス版画コレクションの形成と展示、管理運営を担当されているお二方に、コレクションの使命・特徴・歴史・展示活動などについてお話しいただきます。
あわせて、代表的な出品作を例に、本展のコンセプトにおける位置づけを担当学芸員が解説します。

出演：横田 茂（横田茂ギャラリー代表）
小林弘長（富士ゼロックス株式会社総務部）
中村尚明（横浜美術館学芸員）
日時：4月23日（土）15:00～16:30（開場14:30）
場所：レクチャーホール
定員：240名（先着順）
参加費：無料

2. アーティストトーク

「ゼログラフィー・科学・美術・芸術」

本展出品作家である戸村浩氏を迎え、ゼログラフィーを用いた作品を中心に、数理や科学的思考を軸とする創造活動を語っていただきます。

出演：戸村 浩（美術家・本展出品作家）
日時：5月3日（火・祝）15:00～16:30（開場14:30）
会場：円形フォーラム
定員：80名（先着順）
参加費：無料

戸村 浩（1938年生まれ）
《星・星の数 フックA, B》
2005年 / インクジェット、紙（2冊組）/
6×6×6cm, 6×6×5cm /
富士ゼロックス版画コレクション
© 戸村浩 2016



3. こどもの日・親子ワークショップ

「手づくりスタンプで ランチョンマットをつくろう！」

親子でハンコをつくってスタンプ原画を作成。富士ゼロックスの最新デジタルカラー印刷機で原画を複製すると、オリジナルの紙のランチョンマットに大変身！ちょっぴりデザイナーの気分です。

講師：子どものアトリエ・エドゥケーター
日時：5月5日（木・祝）
1部 / 10:00～12:00、2部 / 14:00～16:00
※1、2部とも内容は同じ
会場：グランドギャラリー
対象・定員：小学生とその保護者・各20組（1組4名まで）
（事前申込、抽選）
参加費：無料
※申込みの詳細はウェブサイトをご覧ください。

4. ワークショップ

「マックス・エルンストに学ぶ、 コラージュ作品集の作り方」

マックス・エルンストの「複製されることで完成する作品」の手法を現代的にアレンジして追体験。写真製版による版画作品を制作して、作品を富士ゼロックスの最新デジタルカラー印刷機により作品集にし、参加者にプレゼントします。

講師：中村尚明（横浜美術館学芸員）
市民のアトリエ・エドゥケーター
内容・日時：全3回
第1回 / 講義、コラージュ制作
5月15日（日）13:00～16:30
第2回 / 写真製版 ※2班に分かれて制作
5月22日（日）
A班 10:30～13:00、B班 14:30～17:00
第3回 / 作品集受取り、デジタル印刷見学、まとめ
5月29日（日）13:00～15:00
会場：市民のアトリエ、企画展示室、
富士ゼロックスお客様価値創造センター
対象・定員：12歳以上・16名
（事前申込、4月18日 [月] 必着、抽選）
参加費：3,000円
※申込みの詳細はウェブサイトをご覧ください。

5. 学芸員によるギャラリートーク

日時：5月14日、21日、28日 いずれも土曜日
15:00～15:30
会場：企画展示室
参加費：無料（事前申込不要、当日有効の本展観覧券が必要）

6. 夜の美術館でアートクルーズ

閉館後の美術館で、学芸員の解説つきで展覧会をゆったり鑑賞できる人気プログラム。

日時：5月21日（土）19:00～21:00
対象・定員：18歳以上・30名（先着順）
参加費：3,000円
※申込みの詳細はウェブサイトをご覧ください。

7. 展覧会・ココがみどころ！

横浜美術館のボランティアが展覧会の魅力をコンパクトに紹介します。

日程：5月11日（水）以降の毎週水曜日と日曜日
時間：いずれも11:00、13:00、14:00から15分程度
担当：横浜美術館ボランティア（教育プロジェクト）
会場：グランドギャラリー
参加費：無料（事前申込不要）

富士ゼロックス版画コレクション × 横浜美術館
「複製技術と美術家たちーピカソからウォーホルまで」

Fuji Xerox Print Collection × Yokohama Museum of Art
Artists in the Age of Mechanical Reproduction — From Picasso to Warhol

会期 2016年4月23日(土) — 6月5日(日)
 休館日 木曜日(ただし5月5日[祝]は無料開館)、5月6日(金)
 開館時間 10:00~18:00(入館は17:30まで)
 ※夜間開館:5月27日(金)は20:30まで開館(入館は20:00まで)

主 催: 横浜美術館(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団)
 協 賛: 富士ゼロックス株式会社
 後 援: 横浜市
 協 力: 横浜高速鉄道株式会社、横浜ケーブルビジョン、FMヨコハマ、首都高速道路株式会社
 企画協力: 横田茂ギャラリー

チケット

	当 日	前 売	団 体
一般	1,300円	1,100円	1,200円
大学・高校生	700円	600円	600円
中学生	400円	300円	300円
小学生以下	無 料	—	—
65歳以上	1,200円	—	—

(要証明書、美術館券売所でのみ対応)

取扱い | 横浜美術館(前売はミュージアムショップ)
 | セブン・イレブン店内マルチコピー機「セブンチケット」

※2016年5月5日(木・祝)は観覧無料
 ※前売券販売期間:2016年1月3日(日)~4月22日(金)
 ※団体は有料20名以上(要事前予約)
 ※毎週土曜日は、高校生以下無料(要生徒手帳、学生証)
 ※障がい者手帳をお持ちの方と介護の方(1名)は無料
 ※本展チケットで観覧当日に限り、横浜美術館コレクション展もご覧いただけます
 ※その他の割引料金については、別途お問合せください

横浜美術館

〒220-0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい3-4-1
 TEL: 045-221-0300 FAX: 045-221-0317
<http://yokohama.art.museum>

プレスリリースお問合せ

横浜美術館 広報担当(宮野、藤井、窪田)
 TEL: 045-221-0319 FAX: 045-221-0317
 E-mail: pr-yma@yaf.or.jp